

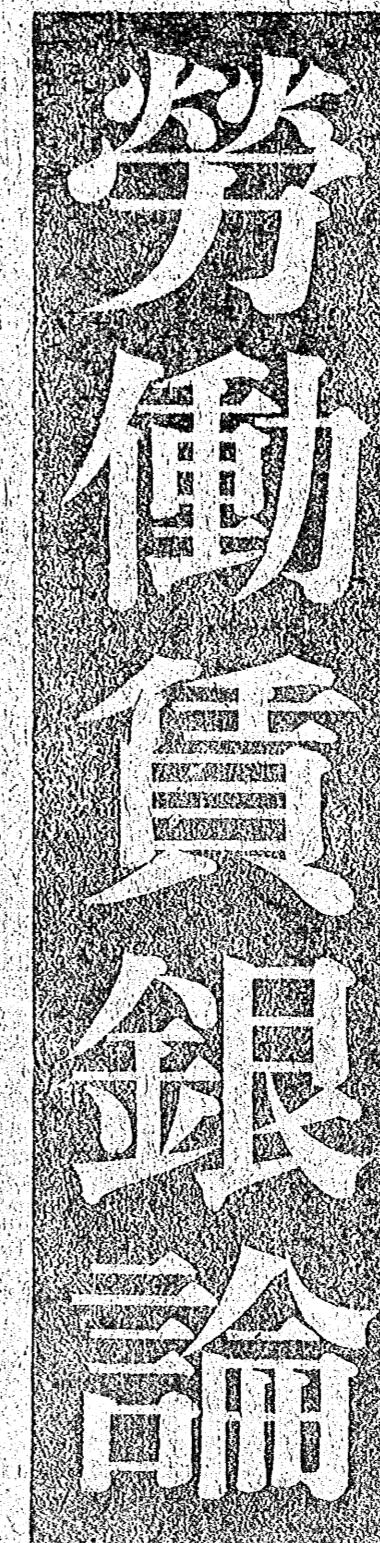
Title	リカルドオの価値論（一）
Sub Title	
Author	小泉, 信三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1922
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.16, No.2 (1922. 2) ,p.151(1)- 167(17)
JaLC DOI	10.14991/001.19220201-0001
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19220201-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

コール原著 貴島憲譯

定價二圓五十錢
送料十二錢



東京橋京三休桶町南

新解放叢書刊行會

資本中心の世の中、何人も無關心なること能はざるは貸銀問題なり。労働者にとりては、實に死活の問題にして、資本家にありては、其の特權の問題なり。此兩者に屬せざる階級ありとすれば、其の人にとりては、生活不安の原因たらざるを得ざるべし。我國の今日に處し、明日に備へんとするものは、本書に來れ!!

◇労働組合指針	定價二・五〇 送料二・二〇
◇生理學	定價二・五〇 送料二・二〇
◇労働問題の現在及將來	定價二・五〇 送料二・二〇

三田學會雑誌 第十六卷 第二號

論 説

小泉信三

リカルドオの價值論(二)

(一)

Adam Smith は時々現實の需要供給に由りて騰落する貨物の市場價格の外に、その自然價格なるものを覗め、市場價格は或は自然價格以上に昇り、或は其以下に降ることありと雖も、長時に亘りて見るときは、前者は必ず後者に歸着せんとするものなる事を說き、而して此自然價格は一貨物の生産販賣に參加せる土地、労働及び資本に對する、自然率の地代、賃銀及び利潤を以て構成せらるゝものなりと謂へり。

自然價格の何を以て構成せらるゝかに就ては Ricardo は Smith と所見を異にしたりと雖も、市場價格は自然價格の支配を受け、究竟之に歸着せんとする約束あるものなる事は、彼の同じく認むるところなり。而して彼は貨物の交換價格とはその自然價格の義に外ならざる事を明言せり (Principles, Ch. IV.)。即ち Ricardo は其價值論に由て、貨物の價格は究竟何に由て支配せらるゝかの理法を明にせんと志したるものなり。市場價格の背後に自然價格なるものありて、之を支配するの説は Smith の創唱に非ず。凡そ一貨物がその品質又はその生産に要する費用に變動なきに拘らず、需要供給と概稱せらるゝ種々の事情の爲めに、市場に於ける其價格の絶えず騰落を免れざる事實は、恐らく容易に人をして、此の外部の事情にて定めらるゝ謂はゞ可變的偶然的な價格の外、別に物に固有の不變的必然的な價格又は價格ありて、之と相對する事を想ふに到らしむるならん。Smith に於ける市場價格と自然價格との對立は、Smith 以前の經濟論には、或は同じく自然價格と市場價格、或は内在價值 (intrinsic value) と外附價值 (extrinsic value) との對立として現はる。今 Ricardo の價值論を論ずるに方りて、先づこの自然價格と市場價格又は

内在價格と外附價格との關係に關する思想の沿革を知るとは無用に非ずと信す。

先づ舉ぐべきは William Petty の説ならん。 Petty は等量勞働の生産物は相互に等價となし、その一を以て他の自然的價格となすものなり。彼は其著 *A Treatise of Taxes and Contributions*, 1662 の中に地代の性質を説明して、一定面積耕地の收穫より耕作費を控除せる餘剰は、其土地に對する其年の自然的地代若しくは眞實地代を構成する事を謂へる後、此の自然的地代は果して貨幣幾許に相當するかの問を起し、之に答へて、別に一人ありて、耕作に費やすと同一時間を費やして銀の採掘精鍊運搬に從事し、斯くして擧げ得たる銀產額より一切の費用を控除せる殘額是なりと謂へり。「一方の者の銀と他方の者の穀物とは、之を同價と評定せざるべからず。假に一方は二十匁、他方は二十ブッシュエルなりとせば、當然此穀物一ブッシュエルの價格は銀一匁の價格たるべし」 (*The Economic Writings of Sir W. Petty*, edited by C. H. Hull, 1899, p. 43) 「人若し一ブッシュエルの穀物を作ると同時間内に、銀一匁を秘露國の地中より倫敦に輸致することを得ば、一は他の自然價格 natural price なり。然るに今採掘一層容易なる新礦の爲めに、能く從來一匁を得るに要したると同じ勞を以

て銀二匁を得とせば、穀物は、他の事情にして變らざる限り、前に「ブッシュル五志なりしもの十志たるを相當とすべし。」(pp. 50-51)即ち貨物の價值はその生産に要する労働量の増減と共に昇降す、「穀物は、一人が十人分の穀物を生産するとき、その僅かに六人分を生産するに過ぎざるときよりも低廉なり。」(p. 90) 然れども茲に Petty が論ずるところは、貨物の自然價格にして、彼は現實の貨物交換比率が必ずも常に必要労働量のみの定むるところにあらずして、投下労働量は更に他の複雑なる事情を俟て決せらる、實際價格の基礎たるに過ぎざる事を認めたり。故に彼は前記自然地代の貨幣幾許に相當すべきかを説明したる後、是を以て「價值の平均並に權衡の基礎」なりとし、「此上に築かる、上部結構と實際とには、猶ほ多くの變化と錯綜とあることを告白す」と記せり (p. 44)。彼は又「自然的廉不廉 natural dearness and cheapness」なるものを擧げて政治的低廉 political cheapness なるものと相對峙せしめたり。自然的價格の實現を妨げて、政治的價格(現實價格)を決定する諸原因としては Petty 或は生産者又は企業家の全出費の、價格に由て補償せられざる可からざる事、土地產物の價格の、生産地附近に居住する消費者數に依り、國民の社會的自然的宗教的意見 (civil, natural and religious opinions) に依り、その生活の華美なると質素なるとに由りて影響せらる、事又或は貨物に代用物あると否と、新奇の風、長上の好む所に倣ふこと等の物の價格を増減することあるを擧げたり。(R. Zuckerkandl, zur Theorie des Preises, 1889 S. 231) Petty はまた別に寶石の價を論じて、その廉不廉を決するものに、寶石自身に存する内在的 (intrinsic) 原因と外附的 (extrinsic) 又は偶生的 (contingent) 原因があることを述べたり。彼が内在的原因として數ふるところは、重量、大小、色澤、瑕疵の有無、及び細工の五にして、偶生的原因としては、(一) 原產地に於ける購買の禁止(二)印度に於ける商人が其資金を金剛石以外の商品に投下することを利となし、從て之を輸入せざる場合、(三)戰亂の破裂を恐れてその買占めらるゝ場合、及び(四)盛裝して場に臨むもの多き大貴族の結婚式近ける場合に、その高價となる事を擧げたり。(The Dialogue of Diamonds, The Economic Writings pp. 625.)

茲に彼のが價值決定の内在的原因として擧ぐるところは、直ちに投下労働量の大小に歸すべきものなりや否や明かならずと雖も、貨物の實際交換比率が投下せられたる比較的労働量と比例することは、その所謂偶生的原因の爲めに妨げらる

ゝものなるとは明白なり。而して此に Petty が偶發的原因として擧ぐるところは、何れも市場に於ける需要供給の動搖を來たるしむる原因なるを以て、彼の意は、貨物には市場に於ける時々現實の價格の外に、是等一時的偶然的動搖に左右せらるべる必然永續的の價格あるものとなし、その決定原因を生産に要する相對的勞働量に求めたりと解すべるものならん。(vgl. Zuckerkandl, S. 231-2—H. R. Sewall, *The Theory of Value before A. Smith*, 1901—W. Liebknecht, *Geschichte der Werttheorie in England*, 1902, S. 3-5)

時々の市場價格の外に必然的標準的價格ありて、之を支配するの思想は、Richard Cantillon の内在價值 (valeur intrinsèque) の說にも明かに現はる。之より先も内在價值外附價值の語は、素と教會法學者及び民法學者が貨幣の品質量目を *bonitas intrinseca* その稱價を *bonitas extrinseca* と稱したるを繼承せるものにして、*A Discourse of Coin and Coinage* 1623 pub. in 1655 の著者 Rice Vaughan も、凡そ貨幣の素材に基づく普遍的價值及びその地方的法定價值との意義に此一語を用ひたりしが、漸くにして *intrinsic value* 又は *natural intrinsic value* は、物の欲望を満たす力、又は固有の質の意義

に用ひられて、その交換力たる *extrinsic value* と相對せしめらるゝに至れり。即ち Locke は物の内在的自然的價值は、その人生の必要を満たし、又は便宜に貢献するの適否を以て定まるものとなし、「貨物の販賣(市場)價格 marketable value の變動は……何等貨物の内在價值又は性質の變更にはあらずして、其貨物の他物に對する或比例の變更なり」と謂ひ、又例へば *An Essay on Money, Bullion and Foreign Exchange*, London 1718 の匿名著者の如きも「それ自體最も有用愉快の性質を具備するものは、最大の内在價值を有す。土地、水、光線は世の最も普通のものなりと雖ども、最大の内在價值を有するものなり」と記せるなり。(Zuckerkandl S. 13-15, Sewall, p. 51. Liebknecht, S. 3) 然るに Cantillon に至つて此内在價值なる語は Smith に於ける自然價格の如く、市場價格の變動の中心、又はその究竟の支配者の意義に用ひらるゝに至れり。彼はその *Essai sur la Nature du Commerce en Général* 1755-Reprinted for Harvard University, Boston, 1892 中に於て、物の生産に投ぜらるゝ土地生産物の量並びに勞働の量及び質がその價格を構成するの理を種々の例證を以て説明したる後、之を概括して曰く「是等の歸納と例證とに由り、一物の内在價格又は内在價值 *le prix et valeur intrinsèque*

queはその生産に入る土地及び労働の量の尺度たること(土地の豊度及び生産物量並に労働の性質を斟酌するものとして)了解せられたるべしと信す」と。此の内在價格又は内在價值は必しも常に市場に於ける現實の價格となつて現はるゝものにあらずして後者は前者の或は以上或は以下に離るゝことあるものなりと雖も、Cantillonの見るところに従へば正常なる狀態の下に於ては二者一致せんとするものなり。而して一物の市場に於ける現實の價格をして内在價值の上下に逸脱せしむる原因は普通需要供給の名の下に概括せらるゝ諸原因なり。乃ち曰く「現に此の内在價值を有する幾多の物は屢々市場に於て此價格に従つて賣れざることあり。これ人の趣味氣分及びその行ふべき消費に由て然るものなり。」例へば一大貴族が其庭苑に渠を通じ臺を築く爲めに巨額の費用を投じたりとせば、其内在價格は土地と労働とに比例すべしと雖も、其實際の價格は必しも常に此比例に従ふものにあらず。是を賣却するに當りては、或は其の費やしたるところの半ばを、償ふ能はざる事あるべく、又之を買はんと欲するもの多ければ、内在價值の倍額をも收むることあるべし。又一國農産物の收穫が年々の消費必要量以上に上ると

きは農産物過剰にして買手以上の賣手あるを以て市場に於ける小麥の價格は必然内在價值又は價格以下に降るべく、反対に農民が消費の必要量以下の小麥を作るとときは買手は賣手より多かるべく、市場に於ける小麥の價格は内在價值以上に騰貴すべし。「物の内在價值には決して變動あることなし。然れども一國に於て商品及び食物の生産をその消費に比例せしむることの不可能は、市場價格の日々の變動、不斷の騰落を惹起す。然りと雖も秩序宜しきを得たる社會に於ては、消費の充分不變均等なる食物及び商品の市價は甚しくその内在價值より遠ざかることなし」(pp. 33-39)。而して貴金属の價格も亦同一の理に由て支配せらるゝ事を說きては「金屬の眞實内在の價值は凡ての物のそれと同じく、その生産に必要な土地と労働とに比例す」と謂へるなり (p. 127)。Cantillonは此處に歩を止めずして、更に Petty も嘗て試みたるが如く、幾許の土地は幾許の労働と等價なるかを決定せんとす。曰く「土地は一切の食物及び商品の素材、労働はその形式なり。而して労働するものは、必然土地生産物に依て生活せざる可からざるを以て、労働の價格と、土地生産物の價格との關係は之を發見し得るものゝ如し」と。乃ち彼れは先づ最

卑賤なる奴隸の労働を以て論を起して、此種の成人奴隸一人の労働は、該奴隸自身並に二人の小兒を労働年齢に到達する迄養ふ爲めに、其所有者が充用せざる可からざる土地量の價值と一致すと謂ひ (p. 42)、次で各種各階級の労働者の必要及び習性を論じたる後、是等の歸納に由りて「人は日傭労働者の労働の價值は土地生産物と關係あること、及び一物の内在價值はその生産に充當せらるゝ土地量と生産に入れる労働量、即ち又更にその生産物が其處に労働せる者に歸せらるゝところの土地量とに由て測定し得るものなることを認む」と記せり (p. 53)。即ち彼は土地生産物の價值と土地其物の價值とを同一視して、最下級労働者の労働の價值は、該労働者と其家族とを養ふに足る土地量の價值に等しき論結するものなり。

Cantillon と、又從て William Petty とも通ずるところ多くは William Harris が *An Essay upon Money and Coins. Part I.* 1757 の中に述ぶるところの説なり。Harris も亦 Cantillon 等と共に「土地と労働とは相合して一切の富の源泉たる」事を説き、「土地の力に俟たずんば生活を維持すること能はず、又労働なくんば甚だ貧寒不快適なる生活のみある」し。故に富 wealth or riches は、或は土地の適宜性か、又は土地と労働との生産物

かを以て成る」を謂へり。(A Select Collection of Scarce and Valuable Tracts on Money, from the Originals of Vaughan, Cotton, Petty, Lowndes, Newton, Prior, Harris and Others. Printed for the Political Economy Club, 1856, pp. 347-8) 而して彼れも亦市場に於ける現實の交換比率以外に物の内在價值あることを認め、之れが決定原因を該貨物に費やさる、土地及び労働に求めんとしたり。而して内在價值なる語が最早 Locke の時代に於けると異なり、物の欲望充足力其者の意義に用ゐられる事は、左の引用に由て之を窺ふべし。曰く「一般に物はその人間の必要を満たす上に於ける眞の用に應じて評價せらる」。而して貨物の内在價值は専ら之に由て決定せられ、而して内在價值は貨物間の交換比率を支配するものなることは「物又は貨物相互の交換は略ば此比例に於てせられ、大多數の物の内在價值が主として評定せらるゝは上記の尺度に由るものなり」と謂ふに徵して知るべし (ibid, p. 350)。斯く Harris は貨物内在價值は生産に要する土地労働及び熟練に由て決定せらるゝと云ふも、就中重きを労働に掛けり。即ち謂へらく、一切物若しくは一切貨物は、土地と労働との產物な

るを以て、貨物の様々なる價值は此二者に依て調節せらる。「然れども大多數の生産に於て労働は最も重きを占むるを以て、労働の價值は一切貨物の價值を左右する主要標準と見るべきものなり。…人々の様々なる必要と欲望とは、彼等を驅つて、自己所有の貨物を、その換えて得んと欲する物に投せられたる労働と熟練とに比例せる一定率に於て賣ることを餘義なからしむ。」と (ibid, p. 352) 但し貨物の内在價值はその相互の交換を支配す云ふも、市場に於ける個々貨物の現實の價格が必しも常にその内在價值と一致するものにあらざることは Harris の明かに認むるところなり。乃ち曰く、特定貨物に對する急速若しくは緩漫なる需要は、その内在價值若しくは原費に何等の變動生ぜざるも、屢々其價格を騰貴若しくは下落せしむべし。人は常に他人の嗜好出來心若しくは必要に應せんとして其機を待てるものなるを以てなり。又買手の賣手に對する比例若しくは特定物に對する需要のその量に對する關係は常に市場に於て影響を有すべし」と (p. 350)。然れども彼の見るところを以てすれば、貨物の價格は結局その内在價值に一致せんとするの傾きを有するものなり。而して此兩者を一致せしむる動力は自由競争なり。

り。即ち人若し市場に順應することを肯せざるときは、(投せられたる労働量に比例して交換を行はざるときはの義) 彼等の商品は賣れずしてその手中に留まるべく、又最初に労働熟練及び一切の危險を考量して、一産業が他のものよりも有利なるときは、其産業に參加するもの増加すべく、その相互の競爭に於て價格を引下げ、遂に其の大なる利潤を他と同一率まで下降せしむるに至るべし。」労働の價值を土地に約元せんとしたる Petty 及び Cantillon の嘗試も亦 Harris の做ひ試みるところにして、其の到達せる結論は Cantillon の夫れと軌を一にし、普通労働者の労働を以て普通労働者を養ふに足る土地量と同價となすものなり。曰く、「…労働者の生活維持の用に充てらるゝ土地量は彼の傭賃となり、此傭賃は又再び土地の價值となる」固より土地一エカアの一定労働量に對する比例は、全世界を通じて一ならず、之は實に土地の肥瘠の同じからざるより生ずるのみならず、又農民の生活状態の處に由りて異なるより生ず。蓋し貧民は、その衆多なるよりして土地產物の主なる消費者なるが故に、労働の低廉なるところ、即ち労働者の生活の甚だ貧寒なるところは、土地も亦低廉なるべきを以てなり。從て土地の價格は常に労働の價

格に由て影響せらるゝと。(P. 353)

上記諸家の説と多少相觸るゝところあるものは Sir James Steuart が *An Inquiry into the Principles of Political Economy*, 1767 の諸節に述ぶる説ならん。彼れに従へば、一貨物の生産費は、その真價 (real value) を決定し、市場に於ける賣價の真價を超過する部分は利潤を構成す。而して價格は此真價以下に降ること能はずと謂ふを以て、Steuart にありては貨物の生産費はその價格の歸向中心にあらずして其動搖の最低限を定むるものと謂ふべし。曰く (Bk. II Ch. IV) 貨物の價格中には、全く相異なる二物ありて存す。「貨物の真價 real value 及び賣却に際しての利潤 (profit upon alienation)」是なり。真價を構成する要素にあり、(一) 貨物の生産に費やさる、平均労働量、即ち Steuart の語を以て云へば、一人が一日一週一月内に該貨物の幾許を造り得るか(二) 労働者の生活費及びその生産要具を供給する爲めの必要費用(三) 原料の價値是なり。「是等三個條を知れば製作物の價格は決定せらる。價格は此等三者の總額以下即ち真價以下なること能はず。是以上のものは悉く製造家の利潤たり。是は常に需要に比例し、從て事情に應じて動搖すべし。」而して生産と需

要即ち供給せられたる貨物の數量と需要若しくは欲望せられたる數量とが相均衡するときは、價格は貨物製作の實費に製造家及び商人に對する少許の利潤を加へたるものと適當の比例を保つなり (Bk. II Ch. X)。彼れは別にその貨幣を論ずる章 (Bk. III Ch. I) に於て物の價格の由て決定せらるゝ原因を擧ぐ。(一) 評價せらるべきものゝ多少(二) 是に對する人間の需要(三) 需要者間に於ける競爭(四) 需要者の範圍及び能力是なり。然れども茲に謂ふところの價格は前に所謂貨物の真價にはあらずして寧ろ價格なり。而して右記四個の原因に由りて決定せらるゝ價格は決して生産費に由て定められたる貨物の真價以下に下降す可からざるの理なきを以て、物の真價はその價格の最低限を決定すとの説は承認し易からざるなり。彼れの、需要の單一 (simple) 及複合 (compound) と、その強弱と大小とを分ち、又單純競爭と複雜競爭とを區別して、其上に立てたる價格理論は「彼れの時代に取りては甚だ進歩せる學説なり」(Zuckermandl) と雖も今說かず。茲には市場價格の歸向中心としての自然價格に關して Smith 及び Ricard の學説を論するに方り、先づ其萌芽と見るべきものを Smith 以前の文献に尋ね、其大略を記して本論の準備をなさんとする

のみ。

附記、Zuckerland (S. 11 f.) の記すが如く、Smith 以前の英吉利經濟論に於ては、value, worth, price の語は嚴密に區別せらるゝ事なく隨意併用せられたるが如し。一財の價值 (value) は之と交換せらるゝ他財の量に現はるゝその購買力を現はし、その價格 (price) は之と交換せらるゝ對價物量を指すことを常としたりと雖も、此區別も必しも常に嚴守せられざりしは、例へば Petty が Amsterdam に於ける建物の價值 value は巴里の夫れの半ばなるべし「佛蘭西より輸出せられたる貨物の價值 value」然れども和蘭より英吉利へ輸出せられたるものは三百磅の價值 worth あり。(Pol. Arithm.) 然れども次の問題は此穀物又は地代は英國貨幣幾許の價值 worth あるか。(Taxes & Contribution) と記し、之と相並んで「貨物の價格」、「土地の價格」、「穀物の價格」と云ひ、又前記「此穀物又は地代は英國貨幣幾許の價值あるか」の間に對して、「……」一方の銀は他方の穀物と同價值 equal value を評定せざる可からず……故に當然此穀物一披シユルの價格 price は銀一匁なり「世界は物を金及び銀にて測れども主として後者に由りてす。……而して若し品位量目同一と認められたる銀

にして其價格 price 升降し、又一個所に於て他に於けるよりも價值あり more worth し……又それに由て評價せられたる valued 諸物に對する比例に於て相違せんか云々 (Taxes etc.) の句あるを以て知る。同様の混用は Locke に於ても之を見る。即ち「一物の價值 value を正しく評價せんとするものは、其數量を、その販路に對する比例に於て考察せざる可からず。蓋し價格を左右するものは是事のみなるを以てなり。」其內在價值 intrinsic worth に於て考ふれば、銀一匁は常に他の銀一匁と同價值 equal value なる。」確實なり……然れどもそは同時に世界の諸處に於て同價值 same value ならずして、その商業に比して最も貨幣少なき處に於て最も價值 most worth ある (Consequenc of Lowering of Interest)「一物の價值若しくは價格 value or price は單にその或他の物に對する關係的のものに過ぎざれば」 (Of Raising Our Coin) 云々等の如し。